## SJ Interview　SJ インタビュー

# 子どもたちと一緒に外出したいという双子のお母さん、お父さんの願いをかなえる

（株）ふたごじてんしゃ
代表取締役社長
**中原美智子**さん

中原さんは、日本初となる６歳未満の幼児が２人同乗可能な三輪自転車「ふたごじてんしゃ」の開発者である。
一般的な前後に幼児を乗せられる２人同乗用自転車には前席が「体重 15kg 以下・身長 100cm 以下」、後席が「体重 22kg 以下・身長 115cm 以下」という製品規格がある。双子のように同じ体格で同じように成長する幼児２人が同乗できる自転車は「ふたごじてんしゃ」が発売されるまでなかったのだ。

### 「二度とこけない自転車に乗るねん！」という決意からスタート

中原さんは 2003 年に長男、2010 年に双子の次男と三男を出産。長男が幼い頃は自転車に乗せて公園などいろいろな場所に出かけていた。「自転車は自分を楽に遠くへ運んでくれる道具でしたが、子どもが生まれると、子どもとの良い思い出づくりや、かけがえのない時間を共有するためのものになっていきました」と中原さんは振り返る。
「次男と三男を連れて出かける時は、２人乗りのベビーカーを使って出かけていました。子どもたちだけでなく、荷物も２人分積む必要があり、その重さは 30kg 近くになります。移動に労力がかかりますから、近くにしか行けませんし、外出する回数も減っていきます。長男と違って、次男と三男は室内で過ごすことが多くなり、自分が原因で子どもがいろいろな体験をする機会を奪っているのではないかと落ち込んでいました」。
次男と三男が１歳半になる頃、自宅から 1km 離れた場所に花屋が開店した。中原さんは子どもたちに色とりどりに咲いている花を見せてあげたいと、初めて自転車の前後に子どもたちを乗せ、花屋に出かけたのだが、その帰り道、低速になった時にバランスを崩して自転車が転倒。とっさに両手を目いっぱい拡げて、２人の身体を守った中原さんは自転車の下敷きになり、負傷してしまう。「ヘルメットをかぶせていましたし、子どもたちにケガはありませんでしたが、『私が自転車で出かけなければ、こんなことにならなかったのではないか』と申し訳ない気持ちになりました」。
子どもたちと自転車で外出することを諦めたくなかった中原さんは「二度とこけない自転車に乗るねん！」と心に決め、動き出す。一般的な幼児２人同乗用自転車は、前と後ろの席で乗せられる子どもの体重と身長の規格が異なるため、双子の幼児には向いていない。まずは、市販で双子に適した三輪の自転車を探すことにした。「高齢者の方が乗っているような三輪の自転車の後部に幼児２人を乗せられるものがあるだろうと思っていましたが、なかったのです」。
次に「ないなら自分でつくろう」という方向に転換するものの、中原さんに協力してくれるメーカーはなかなか見つからない。「自転車に関しては素人だったので、電話しても不審がられました。話を聞いてくれても、『そんな自転車をほしいと思っている人はいない』といわれました。でも、私は本当にそうなのか疑問を感じていました」。中原さんは自宅近くの交差点に立ち、幼児を乗せて走る自転車を日々観察した。「子どもを乗せているお母さんは、とてもピリピリしているように見えました。子どもが一生懸命話しかけても応えようとせず、運転にばかり集中しています。時には、お母さんを呼び止めて、どういう気持ちで乗っていたか話を聞きました。この観察を通じて、自分が困っていること自体に気づいていないお母さんが多いと感じました」。

### 同じ悩みを抱えているお母さん、お父さんにも喜びを届けたい

その後も協力者を探し続けたところ、あるリヤカーメーカーが試作機の製造を引き受けてくれることになった。中原さんは図面とデザイン画を作成し、リヤカーメーカーと検討を重ねた。そして、2014 年８月に「ふたごじてんしゃ」の試作機が完成。初めて次男と三男を乗せて走らせた時は「イメージした通りの感覚だ。これで子どもたちの行きたい場所に行ける。私は自由になれる」と感動したそうだ。同時に問題点があることもわかり、リヤカーメーカーに改良を依頼するが、「これ以上はできない」と断られてしまう。
「私だけが子どもたちと楽に移動できることで満足していたら、ここで諦めていたでしょう。でも、私と同じ悩みを抱えているお母さん、お父さんがいるのをわかっていましたから、やめるという選択肢はありませんでした。皆さんにも、子どもたちを連れて自由に出かけられる喜びを届けたいと思うようになっていたのです」。
中原さんは個人ブログや SNS を通じて本格的な広報活動を開始。オフ会（試乗会）を開催すると毎回、自転車移動の悩みを持つ双子のお母さん、お父さんが集まった。
こうした活動を続けている中、2015 年の年末に「ふたごじてんしゃ」のコンセプトに興味を持った自転車部品製造大手のオージーケー技研（株）（本社：大阪府東大阪市）が声をかけてくれたのである。

### 良い点、悪い点を理解し、納得した上で買ってもらう

オージーケー技研（株）とともに開発を進め、2018 年６月、「ふたごじてんしゃ」の発売を迎える。初回生産分は事前予約の段階で完売となってしまった。「私にとって、発売はうれしいことだけではありませんでした。待ち望んでいたのに手に入らず、多くの方を落胆させてしまったことは、今でもとてもつらいことです。買えなかったことで、通える幼稚園・保育園の選択肢が狭まるなど、子どもの可能性を奪ってしまったかもしれませんから」。
この「ふたごじてんしゃ」の販売にあたっては、「アセスメント販売」という手法を取り入れている。これは商品の良い点、悪い点をすべて購入者に伝え、納得してもらった上で販売する方法だ。
「電動アシストがないので、坂の上にお住まいの方や、長距離を移動する必要がある方には向いていません。また、三輪で絶対に転倒しないから安全だというイメージが先行していて、場合によっては転倒することを知っていただかないと危険だと感じたのです。利用する人の意識を変えることはできませんから、特性を十分に理解してもらうしかありません。アセスメント販売によって、作り手と同じ目線で『何が危険で、どうすれば安全に乗れるか』を考えられる使い手を育てていきたいと思いました」。
動画による利用シーンを想定した取扱説明を作成し、注意すべき点をより具体的に伝えられるように工夫。さらに「なぜこの自転車が生まれたか」という原点を理解してもらうための動画も公開し、共有できるようにした。このようなアセスメントを修了した人のみが購入できる仕組みになっている。
「ふたごじてんしゃ」の購入者からは、「今までいかに不便な生活をしていたか気づいた」「引きこもっていたが、『ふたごじてんしゃ』に乗って外に出ると、いろいろな人から声をかけられてうれしかった」という声が寄せられた。今後、電動アシストの追加などを含め、さらなる改良を検討していきたいと中原さんは話す。

### 人を支えるための自転車の文化をつくる

2021 年６月、自転車の幼児用座席に乗せることができる子どもの年齢制限が、47 都道府県すべてで「6 歳未満」から「小学校入学まで」となった。「6 歳未満」という規定は各都道府県の道路交通法施行細則に定められており、同じ幼稚園・保育園に通う年長園児でも、誕生日の違いで保護者が子どもを自転車に乗せられない事態が生じていたのである。2020 年４月に大分県が「小学校入学まで」としたのを皮切りに日本全国で改正が進んだ。
この改正には中原さんも大きくかかわっている。年齢制限の改正を求め、オンラインでの署名活動を行っていたのだ。6 歳になると同乗できなくなることはあまり知られておらず、違反とは知らないまま乗せるケースもあり、実態に合うようにルールを変えたいと思ったという。
「『ふたごじてんしゃ』を開発する中で、このルールを知りました。当時、『6 歳の誕生日を迎えたら歩いて送迎してください』という通達を出す幼稚園があり、それまで自転車で送迎していた保護者は困っていたのです。署名活動は、こうした問題の存在を提起することが目的でした。始めた頃は、『すぐには変わらない』といわれましたが、『このルールはおかしい』と感じていたお母さん、お父さんが大勢いたから改正につながったと思います」。
今、中原さんがめざしているのは、移動に困っている人を支えるための自転車の文化を日本につくることだ。「街にはやむを得ず道路交通法に違反した乗り方をしている人がいます。例えば、お母さんが障がいのある大きなお子さんを自転車の後ろに乗せているケースです。小学生以上の人を自転車で送迎できるよう年齢制限の撤廃や車体寸法の見直し、自転車の走行できる空間の改善などクリアすべき課題はたくさんありますが、『人を乗せる自転車』について、もっと考えていくことが必要です。自転車に同乗できる子どもの年齢制限の改正を、その端緒にしたいと思っています」。

2014 年８月に完成した「ふたごじてんしゃ」の試作機。中原さんがかわいらしさにこだわって、デザイン・設計している

「ふたごじてんしゃ」の最新モデル（2019 年モデル Ver.）。幼児２人同乗用自転車安全基準（BAA）の適合車。
詳細は「ふたごじてんしゃ」のホームページ参照。https://futago-jitensya.jp/